

譯日牒餘錄

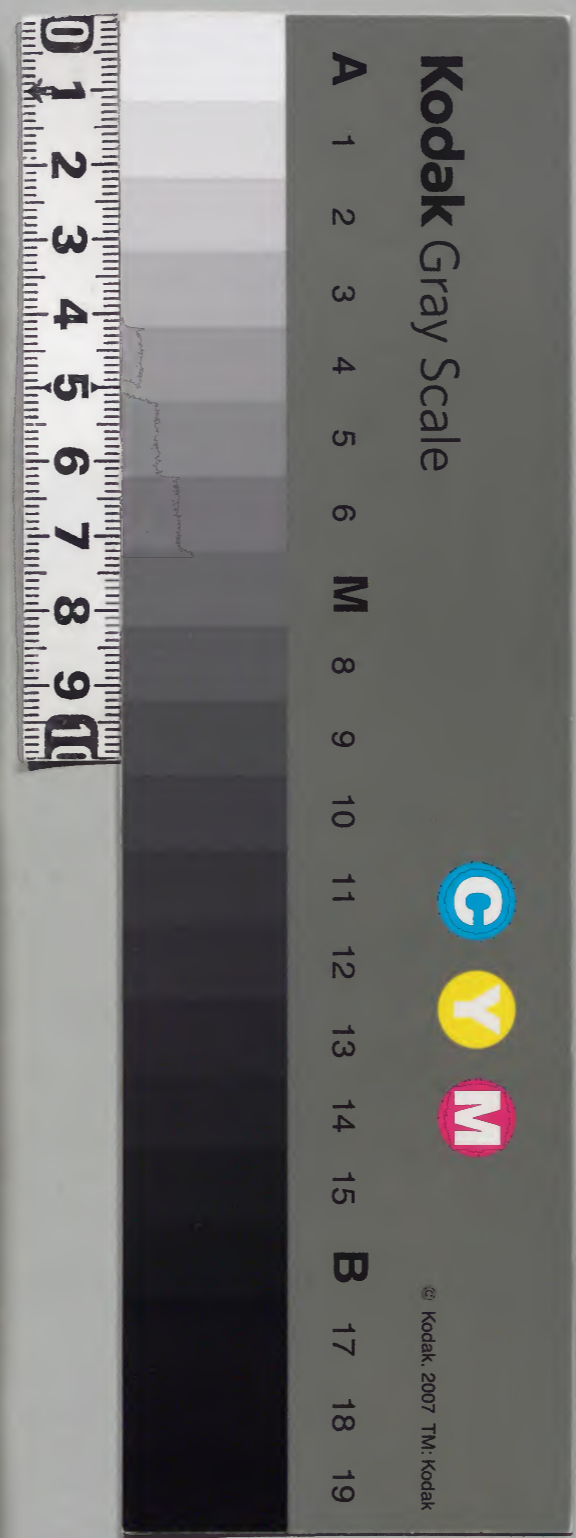
片桐

五十七

卷

內閣文庫	
番號	和 16322
冊數	101 ( 58 )
函號	157 127

內閣文庫			
架	冊	號	類
五十七	101	三三三	和書

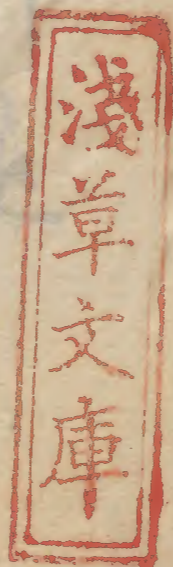






譜牒餘錄卷五十七

片桐又七郎







先身所都述  
 打入有白書狀  
 通加披見作  
 就其涉部  
 抄子以也一書志田  
 勅旨由張領合  
 足或之系者合



新編...  
 (Faint vertical text, likely bleed-through or a title)

六師又十甲  
 (Faint vertical text)





相読て我極了  
極しき者之儀  
毒細行桐市心  
張修少の同了  
中少の杉島  
大流去極より下  
のし也



秀吉  
二月廿八

古田之幼捕の  
二白田豊好ちの  
有林之のちの  
行相之信の  
古田小源の  
物店新の



加波屋内膳の  
長中下村の  
牧村多古物  
少村本継家

小倉喬春  
石出所  
長次郎  
入念の  
又  
馬  
垣越  
洛次  
岡

長次郎 相談  
入念の 相作  
又 方事  
馬 岳  
垣越 村  
洛次 事  
岡 百姓



東山 抄  
下  
生

秀吉 為 宗  
百 九

河 相 東 市

急 度 頭 信 成 一 所  
共 九 至 後 前 是 山  
相 福 一 法 勢 以  
つ 之 一 中 系 以  
地 二 向 存 一 乃 是 也  
遠 海 一 系 出 一 境 乃  
早 一 一 一 一 一 一 一 一  
抄 一 一 一 一 一 一 一 一



河内成つるころ  
極々好ましく  
渡海

考古と河内  
卯月朔日

河内市  
三木

手白く  
人救つ  
同地  
明り  
系  
不  
中  
前



相つるふ事一之審法  
思食の程に之を申す

也

秀吉三郎宗元

卯月下

行桐市四の  
ふま長江の

左致白し書法を

倭侍の國旅之法を

披見の土地法あり

事一々申すに由

なり心入精入致

す滞りの程は程

大気痛あるまふ

しん也



秀吉公河津集

卯月

河相市

文

去平一日之状今自十  
植廣治披見之入敷  
作之

むい先々諸勢之盛也  
依此等之活況之方  
宛涉遠近有等事  
自之地方之治  
人乞出半々之  
下園之活況  
長馬也  
下以



一、お越之、中、  
七、本、船、之、小、方、  
沙、也、  
山、中、橋、内、  
秀、吉、之、  
卯、月、

行、柄、市、  
之、

幸、  
加、  
藏、  
摺、入、  
之、  
花、  
防、府、



之歳少産の道に家  
人救急酒印し  
汗成す時つゝさるる病  
うし月しゆも救急  
石原よりお納めし様  
は申候也

秀吉公御遺書

卯月廿二日

行桐市平のへ

急度病に付今自  
才石原よりお納めし様  
汗成す時つゝさるる病  
うし月しゆも救急  
石原よりお納めし様  
は申候也



申上りては、  
は、  
こゝせ

秀吉

卯月十六日

行桐市正の  
之

宛前  
ちり  
毛  
集  
不  
つ

秀吉

卯月十六日



行桐市ふり  
かひを因縁する

書状へ函をすて  
念乞入 能く成  
いふ事あるは  
のりせしむるは

下等々同自然海  
不抄念事本  
のり川舟くら  
舟を用念付  
念船してお  
いふ事お越  
を不中

秀吉の汗録  
卯月廿九日



行桐市平の  
加次屋内信の  
長、八、在陣幸勞  
不及是此向惟一  
事下い合を心流又

情、就、を、出、は、馬、を、示  
候、以、涉、了、書、出、候、事、に  
猶、能、心、合、を、心、流、之、事、に  
了、也

長吉屋内信

行桐市平

行桐市平の



津波に罹りし  
粉骨に成りし  
粟入念下中  
付事所要  
之を後世に  
早之を後世に  
来りて今也

秀吉の行状  
九月十日

小幡東経の  
行状市中之

お加殿の御  
守子同書子  
人本



皮色は深うお法流は  
金山浦の一揆根中  
各令相談人教は為  
又今世紙方極下時  
物又向まを天下下一為  
能傳く柔南物感事分  
人教無言の及ま死  
物事分をを根流の

綱目

秀吉の汗書  
九月廿二日

十一人上使布

根公呂末城由王居成  
知はは名三島海平  
常陸も三人何何二和







少下五く程本不五分  
山中橋岡一也

秀吉公河津

十月十九日

羽葉母後おねの  
明葉車乃結後  
本村乃陸女  
牧村乃幼大福

小舟東洋海女  
行初王屋  
行初市  
高田豊後  
高掛六  
高本  
高村



此心胡解托子之解自是  
其心自是也其心也其心  
不其尾也其心也其心也  
其心也其心也其心也

就主之教後能容境人  
其心也其心也其心也  
為在書在之中心也其心  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也

均之而後能解之獲  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也  
其心也其心也其心也



不友之北河出能一  
事不心之之序也  
考之了程有人言也

秀長云河津系

十月十日

河相市心人

程三月又台之狀之故  
其美之之故卒亦勤而  
其用之今及之仁者信之  
城之涉者四里之有

急度之江心之津門  
大集大吏事一人後  
年人之書亦不見及  
其若訪外之者也  
願其果之也其子也



人教之持志之先也  
物見之也又弓矢決地  
考之也其相也也也  
法合也之也人會人會  
隨就也也也父也也  
其也之也也也也也  
也也也也也也也也

教之持志之先也  
物見之也又弓矢決地  
考之也其相也也也  
法合也之也人會人會  
隨就也也也父也也  
其也之也也也也也  
也也也也也也也也



於お宵さつるおまの  
しとせとせとせとせと

秀吉と源次郎

極月六日

少将兼源次郎の  
牧村と源次郎の  
是れおまの  
新庄源次郎の

左衛門源次郎の  
加須源次郎の  
行桐市郎の  
月 源次郎の  
源次郎の  
右衛門源次郎の  
源次郎の



七度之三度後依條  
板港別大稀之條  
高之末田地程元玉  
柳嫩表表能制之條為  
て及一載一騎強地而  
以之表三句之條自  
子之在志以之表古能

昭方合了書法之動  
之次第之條為條  
之字之末以沈深  
在之條之動之條  
領之也河川  
天皇十一  
宵中

河桐物能



六反南城就之惠  
此九百石也  
之混自余親城  
杜忠之以候  
情江州  
中今之市  
中今之市

名之隆  
之卷  
官其  
長及利

片桐孫太  
沙岩



為増可之合字首  
石月派別紙より  
中知日子載首在紙  
を言はる杖如平  
全三願知友の同石  
其收し之段清増  
儀と云ふに於紙は  
嶽及一紙割碑

粉骨後法思ふ為  
を法感付也

又法  
首首  
唐古云云

戸相も市の中

是

一 秋月よりを紙或は石を採らん







一 音石系林原田のりりちりりくくおん  
 分りし付るる是と有るあゝあゝあゝあゝ  
 一 五百石家の人と云ふおんちりちりり  
 了物也あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 東田の家もあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右根法あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右長根あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一 音石系林原田のりりちりりくくおん  
 分りし付るる是と有るあゝあゝあゝあゝ  
 一 五百石家の人と云ふおんちりちりり  
 了物也あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 東田の家もあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右根法あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右長根あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

音石系林原田  
 分りし付るる  
 五百石家の人  
 了物也  
 東田の家  
 右根法  
 右長根

一 音石系林原田のりりちりりくくおん  
 分りし付るる是と有るあゝあゝあゝあゝ  
 一 五百石家の人と云ふおんちりちりり  
 了物也あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 東田の家もあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右根法あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 一 右長根あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ



禁制

高森國

一 軍務甲乙人出巡坊復藉事

一 放火事一人多事

一 對地下人并百屋臨時之謀殺之外

此之成事

右条之便法序少之記若後記

於此之者忽之法廣教科者也

秀吉之河島下

天正九年一月廿六日

提

高森國中

一 市法度外一書者判取を仕在

一 考地下人下之由事

一 去糧改事一方米分若悉抄改

一 考之入事

一 百姓町人急便之立之志先米後金

一 復とお懸之考之但控至町

一 至由之改事



- 一 高麗一紙の人数兵糧を乞ふに  
 次第に扶持方にお濟事
- 一 かに急い百姓控を乞ふ者分年うつる  
 屋敷小と合利を申付度
- 一 在る所を救火仕る者申事  
付多るを龍入割に捕はるる者  
 男女を乞ふ者
- 一 法度以下控おとすに  
 控申とは色を乞ふ申事

一 高麗渡り申事  
 城を乞ふ者御原申事  
 清正は乞ふ者御原申事  
 不申事法度以下申事

右之御事、お申法事、之御事  
 申事也

秀吉公御事  
 天正九年正月廿一日



行綱市心

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

下如毒四  
氣を及是此  
左取之  
沙和子  
成并  
取  
主  
之



糸是北村の書  
引くは為る事  
は彼之前ん  
くしたる事  
仲有るた事  
之種中  
取成  
多  
此

糸是北村の書  
引くは為る事  
は彼之前ん  
くしたる事  
仲有るた事  
之種中  
取成  
多  
此



行桐市正乃  
常三

わの  
たんまあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ

あけあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ  
あけあ



あまの井のふりかへす  
とよめいんか  
何してかす  
かきんや  
といふたの  
あまの井のふりかへす  
かきんか  
あまの井のふりかへす

あまの井のふりかへす  
りかへす  
あまの井のふりかへす  
あまの井のふりかへす  
あまの井のふりかへす  
あまの井のふりかへす  
あまの井のふりかへす







いふはふさふさのうらみ

一 けしきよきうらみのうらみ

よきうらみのうらみ

あつちのうらみのうらみ

いふはふさふさのうらみ

もよほしうらみのうらみ

一 ひたひたうらみのうらみ

あつちのうらみのうらみ

一 やさしうらみのうらみ

いふはふさふさのうらみ

あつちのうらみのうらみ

一 いふはふさふさのうらみ

あつちのうらみのうらみ

いふはふさふさのうらみ

あつちのうらみのうらみ

いふはふさふさのうらみ

あつちのうらみのうらみ

いふはふさふさのうらみ



あまのあまのいのかげのあまのあまの

いさゝかきんのもかきん

うたのうたのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの



下市と存し  
知加橋の  
何れも不  
分列の  
此西事  
一市  
九月廿日

行桐市

只今迄  
自  
行  
夜  
未  
甲斐



中世心 為  
重与中  
海

九月廿日

行桐市

為心(心)之作  
心之志心之静  
心之志心之静  
心之志心之静  
心之志心之静  
心之志心之静  
心之志心之静  
心之志心之静



おのり 菊の 月  
一 月 月 月 月 月  
入 精 一 月 月 月 月  
高 三 月 月 月 月 月

秀次公御書

二月廿二日

行柄市守の

為 月 月 月 月 月  
老 月 月 月 月 月  
此 月 月 月 月 月  
之 月 月 月 月 月  
帷 子 二 月 月 月  
行 月 月 月 月 月

秀次公御書

卯月九日



行桐市心

出陳心少好  
考早何  
是科民  
松子  
高如尾

也

秀次公

卯月十日

行桐市心

隨心物

同



少思之也

了如若若若之

之及是也

付身如之

下之也

秀治云

五月廿六日

行桐市

之之

之

之

之

之



此属  
之  
也  
之  
也  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也

其  
次  
之  
也



李正厚之詩  
石及之竹文  
諸篇之文格  
也

秀次公詩集

九月

行桐市心

先祖中法書相副定

指現極清内書 三通

台德院極清内書 三通

秀賴公清書 二通

渡後出狀極清内書付

織田常去書狀之通

如多上野分書狀之通

板倉内書

如多上野分書詞



中多佐渡と申状に

外

指原御汗書

二通

多佐院御汗書

一通

河加増初御汗書

中多佐渡と申状一通

秀吉公汗書

一通

源井御前と申状一通

秀吉公汗書一通

秀吉公汗書一通

秀吉公汗書

一通

以上

先度より頼事状

河津村御書

中多佐渡と申状一通

河津村御書



杉山南の申す如く  
之を以て略す之を以て

権程流津車利

卯月六日

行桐市夏

右に云ふは是れ新  
紙披ふ中にも河

大崎理忠代友下  
成池浦屋方一若  
浦中屋方一若  
浦村成屋方一若  
浦中屋方一若  
浦中屋方一若  
浦中屋方一若



権現原河原宗河書判

卯月下

行桐市向也

今度備人ノ族

種ノ純粋ノ事

主方ノ一ノ業

思召ノ事ノ事

秋本とて之正也

清満是思召の程

本及上野今正也

権現原河原書判

十月七日

行桐市向也

主方候事也



之使く事に事な氣  
義者亦た之に相柳  
中して満是く事也  
石門に事な事に  
中作也

右徳院極浄寺

十月廿六日

行桐方印の

就上之度事馬  
吾に誠使去る候  
念入の候事な事  
物に事な事に相柳  
事な事に事な事  
事な事に事な事  
事な事に事な事







与之... 亦付... 及之... 主... 安... 相... 相...

市... 月... 七... 之...

六月... 名...

行... 行... 行...



あふゆり  
事し安んじ  
新あゆみ  
主ふ  
神  
上  
作

あふゆり  
事し安んじ  
新あゆみ  
主ふ  
神  
上  
作



少西信清書  
十月十日  
名実利

行桐市山根  
少波

あるまじき事  
大御所様  
少波  
相又深平次郎

一書と信  
少波  
相又深平次郎  
他方  
大御所様  
少波  
相又深平次郎



涼平似玉之  
上之極子如之  
中沸意少所  
外之  
後具之  
嘉細之  
乃之

十月  
本  
名

行  
年

子  
神  
之



一書入のて後事

四柱のりは是のりく  
大坂のりは是のりく

少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく

少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく

一版神妙なる版は是のりく

少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく

是のりは是のりく  
大坂のりは是のりく  
少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく  
大坂のりは是のりく  
少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく  
大坂のりは是のりく  
少のりは是のりく  
板倉のりは是のりく



主位加曲、向く秋末。  
一、有る所、行はし履後  
尚ほ、のち之運、由相  
等し、まゝ、西行也  
上清、新、字、白、原、林  
妙、以、成、法、意  
子、大、教、印、子、女、身、本  
之、神、也、也、備、記、也

人、清、山、新、山、馬、山、名、法  
成、る、方、は、月、身、の、時、に、也  
其、由、故、地、月、身、の、也  
之、法、也

十月

中、女、と、時、介

名、字、判

板、倉、月、信、心

名、字、判



行相市面概  
今中

行々々度也仕合

神妙如彼之也此地

法人感入中々々々

一書之律之也西大坂

油所極何別之律律々

早々如遠播付國嶺

本之也之進之故也

板行利古也治也

也所也方之股上之

乘處之也神妙如

之也如之思也石大

形也如也之也大所



瘡以名也滿是之法  
心口之口能口口口  
口之口口口之口口  
口口口口口口口口  
又奇物如口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口

事一之口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口  
口口口口口口口口



河原中事  
意と申す可申  
比ふ山と云ふ如  
七月三日申  
少くも申す可  
下る申す可  
其系下丸申す

名指  
十月  
名系判

行相  
申す

大津  
申す



一書波破之了也  
下  
度大坂之松邊法  
何事也  
主退  
神妙成  
足之  
是之  
書之

百  
中  
威  
大  
為







老札 為見への心度

大平... 後... 遠... 中... 大坂... 中... 遠... 中... 大坂...

大平... 中... 遠... 中... 大坂...

中... 遠... 中... 大坂...

大坂... 中... 遠... 中... 大坂...

中... 遠... 中... 大坂...

中... 遠... 中... 大坂... 中... 遠... 中... 大坂... 中... 遠... 中... 大坂...



主従者未<sup>レ</sup><sub>レ</sub>之<sup>レ</sup>也  
子<sup>レ</sup>境<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
家<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
方<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
深<sup>レ</sup>奥<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
於<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>也  
沙<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>也

方<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>也  
沙<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>也  
深<sup>レ</sup>奥<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
於<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>也  
方<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
家<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
子<sup>レ</sup>境<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也  
主<sup>レ</sup>従<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也



了後府の事子四  
念別の候生事忘症  
之由之候内事  
少症も一象作之  
紅珠之候候  
十月十日  
尾山守  
尾山守  
尾山守

尾山守

心道  
尾山守  
尾山守  
尾山守  
尾山守  
尾山守  
尾山守  
尾山守



清世判之 清内書  
之在後志也  
象行中紙面之  
張之了了  
可也  
中入以  
振之  
何之

家物如  
比之  
少  
余  
構  
至  
是  
少



百之九之三之九  
謙乞

東下野介

十月五日 奉判

行桐市白紙

中紙

致白紙信文前書事

一 今度片桐市に及同主能及大坂と  
由之進り成候事とら何南うるか  
いふに候中成候事

今所存左様に出さるゝいと久に  
所へあるは方候り申あて候

日本中事下少し申候事と海大  
不さる候程根あふ候程候事  
是下候事



得妙得よ家ら夫々實あつて  
二款とむらん志つめ大隔おれ  
もら生ら實あつてさうて毒世に  
らん志つめい号金飾りては  
おとせしとていんかかり候  
をて成る海人の件

一 孝長十九年

一 本多上野介

一 十月廿日

一 龜書判  
一 實判

一 行相市正及  
一 行相主殿及

一 沖知行の書

一 音九孫石字平

和判平紙一冊

一 三ツツアノ村

一 百三孫石字平

一 南畑村

一 百三孫石字平

一 志ツツの畑村

一 百三孫石字平

一 三ツツ村



一 百七拾七石六斗六升

有東村

一 百七拾石六斗六升

とう志村

一 百七拾石六斗六升

世屋村

一 百七拾石六斗六升

ふの井村

一 百七拾石六斗六升

吉田村

一 百七拾石六斗六升

つ屋村

一 百七拾石六斗六升

ふさ村

一 百七拾石六斗六升

腹戸村

一 百七拾七石六斗六升

おさき村

一 百七拾石六斗六升

瀬田村

一 百七拾石六斗六升

はら村

一 百七拾石六斗六升

下か村

一 百七拾石六斗六升

うさ村

一 百七拾石六斗六升

あま村

一 百七拾石六斗六升

あま村

一 百七拾石六斗六升

あま村



一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村

名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村

一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村  
 一 六百石程石名村

名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村  
 名田村







一 七拾之石名平年

与川村

一 五百之石名武平年

市之村

一 二百之石名平年

吉田村

合武之石名平年

計四

一 字首九拾石平年

播磨之播磨

一 字首九拾石平年

播磨之播磨

一 字首九拾石平年

播磨之播磨

右之石名平年

一 字首九拾石平年

一 字首九拾石平年

加波之石名

一 字首九拾石平年

石名

大分保之石名

石名

三原之石名

石名

行桐市之石名

石名



先刻之利純利酒  
中在之利純利酒  
正印可家酒  
之利

二月九日

中利

版

付田志大

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

是

一 關原陣

大津所攝上河市正國之能正境最  
以能抑言上は信長國ヶ原法退治之後  
子孫大坂口入津の難松右之乳養類  
お養法好身之公事上は年々老云養者  
云所遺言と相守之法其の之を封  
津所様遠較の事好言上は其後  
四代入市正の兄弟女侍の之を



一 德前之寺於遠心寺沙彌之思  
念由之大坂為入公刻之務者之  
市正之德心寺沙彌之思

一 大寺之權法大坂遠心寺沙彌之思  
中門之書市正之德心寺沙彌之思  
相勤之寺於遠心寺沙彌之思  
上意之通之於遠心寺沙彌之思  
寺城出之寺居主德心寺沙彌之思

一 關之原陣墓年記

大寺所權市正之德心寺沙彌之思  
少之寺於遠心寺沙彌之思  
其長之德心寺沙彌之思

貞享元年七月廿日 行相又全席



一 慶長九年甲寅年八月移居東山寺  
 堂後養後秀頼公之江戸親行に自限  
 定りしと云ふ事有後政府  
 大澤町板板倉信前守前日上意  
 中尾右衛門儀武信公に在成  
 一 右為江戸新行相市に其大坂女中  
 修理母大系公後多田親和母西永後  
 子中尾右衛門儀武信公に在成  
 一 右子板倉守之儀居住其家  
 大澤町板板倉信前守前日上意

腫痛

大澤町板板倉信前守前日上意  
 大坂より  
 家康公と調伏がりの江戸意  
 佛信公長く日東中膝立  
 より相中ぬの指に風流  
 大澤町板板倉信前守前日上意  
 達上守のりしと云ふ事有後政府  
 江戸意と市守と云ふ事有後政府



申上後入の事付為上府中事  
合地後は市正方の一歳下  
上意は陸路底の市正首  
政右海路の歳用控の戸  
將軍帳と秀頼の河申事相違は  
契約と市使市正付の法  
正清の申事年少  
支所所帳より秀頼の河申事  
補との河田書とを秀頼の年  
陸定後

對

支所所帳毛頭を義田食料河申書  
力の減取物と申すは度と河申事  
を作帳と秀頼の申事市正  
得と申す今申地後申した  
申す相海申事河申事市正  
河申事より河申事申事  
以上一早申事河申事申事  
城上河申事河申事申事



御意とて九月十日一市に渡渡府  
より在りて筆

一 道中に教度大衆の心

大衆所振意を尋ねて尋ねし得る事  
お我々角の子細を申す如くは  
お江別古の所より又大衆の心  
市に渡渡府

市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府

中多し 市に渡渡府  
院に在りて市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府  
市に渡渡府



桑頼公河津在江戶須賀後成河津役人江戶  
河津下流石籠石大坂石塚を築く上他國  
今之河津分道法を以て柳公之記作以記  
此之河津之外市心之存否等々其詳中記  
此之河津中記之河津其毎に大坂石籠石  
大坂石塚也  
大河津河津河津内之通市心等々其詳  
中記之河津中記之河津其毎に大坂石籠石  
上之河津頼公に河津役人其河津内

一河津も河津内之通市心  
河津河津河津内之通市心  
市心之河津河津内之通市心  
河津河津河津内之通市心

一河津も河津内之通市心  
河津河津河津内之通市心  
市心之河津河津内之通市心  
河津河津河津内之通市心  
梅心之河津河津内之通市心  
河津河津河津内之通市心



市平家東出流法を講ずる者城志を度  
お流るべき事常真本を講ずる事  
の市平の事大率成の中平字の地  
言付まゝに名命事仕立の儀有るに  
その意は常真法中より大坂津中九赤  
若く其の事くありて後今令度之條  
同て成流河公成の事市平とたは  
波河と名下を流す市平業より下  
河相之儀とて生害をせむとて

之の元又市平の切腹之法は  
河渡合をては先時お流の市平は  
敵討面よりてお流の事市平は  
柳ふと然に常流儀の廊下より生害をせ  
るに市平の事流すに討をては市平  
照るに市平の事流すに討をては市平  
柳ふと然に常流儀の廊下より生害をせ  
るに市平の事流すに討をては市平  
照るに市平の事流すに討をては市平  
柳ふと然に常流儀の廊下より生害をせ  
るに市平の事流すに討をては市平







お教のうき為出事い候と云哉若らう  
此柄にまたさうゆと一信り申付  
の事

一 右と通申こと又申付し候に七組と申  
と申申の松かへ秀頼らも流度少も  
何い流度にはさうい候是市い出候  
とは清奉らうと申申市い不義我は倍  
まけりて對秀頼とも改申と仰る事  
清先は不長と申候方とは清奉らうの仕

一 柳吉左衛門の道も一と申候に  
申又日清城より在候と後申候は  
一 柳吉左衛門の道も一と申候に  
また申候に捕場田高事と申候人  
野村伊藤と申候武徳捕あつと申候  
お申申市い申候と申候と申候  
う候運と申候と申候と申候  
末意申候と申候と申候と申候  
申候と申候と申候と申候



双方と通ずる川に其時市に於て結ぶ位居  
は之と以後は行かたた所より後  
常陸と大坂人等一回信申す市に  
猪心家等心すは之と相違ひ  
けしと申すは為難く位居は之と相違ひ  
市に於て信申す事

一 右の如きは事所より足寄り申す動其  
津城と常陸と大坂と相違ひは  
後者たすは之と相違ひは

大川より申すは之と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは  
川津城と常陸と大坂と相違ひは

一 九月廿一日市に於て結ぶ位居  
は之と以後は行かたた所より後  
常陸と大坂人等一回信申す市に  
猪心家等心すは之と相違ひ  
けしと申すは為難く位居は之と相違ひ  
市に於て信申す事



合張方、依津城より上河津黒石平井  
法日取在集、是皆海為之、海日之  
至在十月、初卯刻、市に、屋場、其、  
信、心、年、去、も、心、を、ん、ひ、を、亦、  
中、村、に、俄、子、細、有、く、亦、未、上、紙、以、名  
之、旨、お、能、為、一、中、中、後、市、に、は、紙、  
忌、宗、物、の、一、中、中、後、市、に、は、紙、  
中、一、中、一、中、一、中、一、中、一、中、  
尤、以、列、に、し、し、不、中、中、中、中、中、中、中、中、  
心

と、亦、僅、く、若、ま、と、具、是、と、之、心、  
何、之、方、は、中、大、繩、ふ、も、大、紙、は、  
事

一、右、是、美、里、に、七、里、高、く、大、坂、より、一、里、  
程、有、り、大、野、修、理、子、信、濃、織、田、有、樂、  
子、或、是、花、人、實、は、御、舟、見、舟、の、こ、の、  
為、鞍、馬、の、せ、道、具、の、に、侍、人、も、  
多、人、つ、ま、し、御、舟、見、舟、の、こ、の、  
より、右、人、實、有、り、か、の、御、舟、見、舟、



只青々春日入河分秋来及夜多公事  
一 波府江戸右名あて中上市田家  
小治店名清梅庄忠物中中中中中中中  
秋来より京都と云ふ人板倉津屋吉右衛門  
東向中達るまより忠物中中中中中中中  
六百吹波府江戸波府忠物中中中中中中中  
正三とて候中中中中中中中中中中中  
波所振込前中中中中中中中中中中中  
波所振込前中中中中中中中中中中中

一 波府江戸右名あて中上市田家  
小治店名清梅庄忠物中中中中中中中  
秋来より京都と云ふ人板倉津屋吉右衛門  
東向中達るまより忠物中中中中中中中  
六百吹波府江戸波府忠物中中中中中中中  
正三とて候中中中中中中中中中中中  
波所振込前中中中中中中中中中中中  
波所振込前中中中中中中中中中中中



仕合とて歳時定 河内書歳成使名時  
暇波有頃在出の事

一 中多上舟介板倉内信向より

大河新板津威之旨誓文状安也依後書  
より其様考案と存を下中台

西津取板と意と強中紙をより下河内書  
おと夜市といふ船のていふ河内書都出意

存とて河内書とて中河内書とて事

一 西津取板津板津板子中多依波と同し

世介より市心と事状教を互に紙の事

一 京都より河内書と河内書と河内書と

よといふ河内書は合是非とて存も河内書

河内書中と河内書と河内書と河内書と

河内書中と河内書と河内書と河内書と

陣の河内書お勤の事

一 大坂河内書板月女白河あけのしよ河内書

河内書河内書河内書河内書河内書

河内書河内書河内書河内書河内書



お流度度と申達は子細の家方清然と  
上意給所は存 清陣中ハ虎口を關中後  
不存成付清奉と申上は馬塞仕  
概

安常所取上清取成頼公旨再遊中達ハ  
主候能ハ諸達 上中込均と申上は  
兄弟今ノ度と南尾園ノ系以東  
大清取概 上意ハ通事申上は清所寄  
以方世上一上俾中候以別上忠勅上思合

以旨清所取 上意付上は上奉  
一お勤名市正日候上成清清中上然  
夏上清陣中清候別お勤上事

上

貞享元年子七月日





Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, is visible on the right page. The text is arranged in several lines and is partially obscured by a large, rectangular red seal impression. The seal impression is a square seal with stylized characters, possibly a personal or official seal. The handwriting is dense and difficult to decipher due to the cursive style and the presence of the seal.



